

機能動詞「受ける」の ヲ格名詞に対する一考察

—漢語動名詞を中心に—

朱 薇娜

●要旨

「影響を受ける」を「影響される」と置き換えられるように、「受ける」は受身の文法的役割を担う機能動詞と見なし得る。本稿ではコーパス調査を通して、「レル・ラレル」形の文法的受身文と対照しながら、「受ける」のヲ格名詞、主に出現頻度の最も高い漢語動名詞の特徴を見る。

結論は以下の3点である。

- ①「受ける」を用いた語彙的受身形式は基本的に受影受動文に属する直接受身文と対応関係を成しやすい。
- ②「影響性」は受影受動文に属する文法的受身文の成立を左右しているが、語彙的受身文の成立条件ではない。
- ③語構成の観点から、「受ける」のヲ格名詞には「撃沈」のような「動作+結果」タイプがない。一方、文法的受身形式は動作主の行為で引き起こされた結果を含むこともあり得る。

●キーワード

受ける、機能動詞、ヲ格名詞、影響性、
有対他動詞

●ABSTRACT

Ukeru can be considered as a functional verb which fulfills the grammatical role of passive voice (e.g. *eikyou wo ukeru* can be replaced with *eikyou sareru*). In this paper, I examine the characteristics of the *wo* direct object nouns of *ukeru*. Particularly, I will focus on the Sino-Japanese verbal nouns which occur frequently in the object position. I will compare these structures with that of grammatical passives marked *reru-rareru*. The examples in the present study are based on examples collected from the NLB corpus.

Three conclusions were drawn based on the results obtained from the data in this study:

- (1) Basically, the lexical passive construction of *ukeru* tend to correspond with direct affective passives.
- (2) Affectivity determines the well-formedness of grammatical affective passives. However, it is not the well-formedness condition of lexical passives.
- (3) In terms of word construction, there is no "action+result" type in the *wo* direct object nouns of *ukeru* (e.g. *gekichin*). In contrast, the grammatical passive construction may have this type, which predicates the result by the agent's action.

●KEY WORDS

ukeru, functional verb, *wo* direct object noun, affectivity, transitive verb which has correspondent intransitive verb

The *Wo* Direct Object Nouns of
the Functional Verb *Ukeru*
A focus on the Sino-Japanese verbal noun
ZHU WEINA

1 はじめに

下記の例文 (1) (2) において「影響される」は「影響を受ける」と言い換えられる。このように、日本語では文法的機能を果たす受身のマーカー「レル・ラレル」の代わりに、受身の意味を表す動詞「受ける」を用いて言い表すことがある。

- (1) 子供は他人に影響されやすい。
- (2) 子供は他人の影響を受けやすい。

村木 (1991:203) は、機能動詞を「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的機能をはたす動詞」と定義しており、「する」を典型的な機能動詞と見なすほか、「誘いを受ける」の「受ける」はヴォイス的な意味を表す機能動詞としている。本稿では、村木 (1991) の考えを踏襲して受身の文法的役割を担う「受ける」を機能動詞と見なし、「受ける」と機能動詞結合を形成するヲ格名詞に焦点を当てて論じる。

2 先行研究

「受ける」は多義語で、小泉他 (1989) は9つの意味・用法に、森田 (1989) は構文的な特徴による4種類の構文に分類している。その意味・用法のうち、「ボールを両手で受ける」、「学校から奨学金を受ける」のように、一般名詞と結びつく場合がある。この場合、「受ける」はそれぞれ「受け取る」、「もらう」の意味で、受身の文法的役割を担う機能動詞と見なさないため、それらのヲ格名詞を本稿の考察対象から外す。

2.1 小泉他 (1989)

9つの意味・用法のうち、受身の文法的役割を担う機能動詞として考えられるのは②③である。

- ①落ちてくる物・向かってくる物などを支え止めたり、出された物を取る。
《文型》[人] {が／は} [物] を [物・身体 (部分)] {に／で} 受ける
例「母は天井からの雨漏りをバケツに受けた」
「弘は飛んできたボールを頭に受けた」
- ②外からの行為や働きかけに応じる。
《文型》[人・組織] {が／は} ([人・組織] から) [事・活動] を受ける
例「順子は友達から相談を受けた」
「店は大会社から注文を受けた」
- ③外から身心に作用・行為を加えられる。
《文型》[人・物・事] {が／は} [人・物・事] {から／に} [心理・活動・事] を受ける
例「私はその知らせにショックを受けた」
「先生は町の人々から尊敬を受けている」
- ④他から何かよい物をもらう。
《文型》[人・組織] {が／は} [人・組織] から [物] を受ける
例「青年団は市から功労賞を受けた」
「父は社長から金一封を受けた」
- ⑤光・風などに身をさらす。
《文型》[人・物] {が／は} [光・風・方角] を ([所] に) 受ける
例「船は帆に追風を受けた」「彼は夕日を背に受けて立った」
- ⑥天から授けられる。
《文型》[人] {が／は} ([天・神仏・自然] から) ([世] に) [生命・恩恵] を受ける
例「私はこの世に偶然、生を受けたのだ」
「私たちは自然から恩恵 [恵み] を受けている」
- ⑦跡を継ぐ。
《文型》[人・家系] {が／は} [跡・血筋] を受ける
例「恵子は母方の血筋を受けている」「父の仕事の跡を受ける」
- ⑧話・うわさなどを信用する。
《文型》[人・組織] {が／は} [言葉・話] を 副詞的要素 受ける

例「弟はその話を真に受けた」「人の言葉を軽々しく受ける」

⑨人々の間で評判がいい。

《句型》[人・物・事]{が／は}[人]に受ける

例「あの俳優は女性に受けている」

「こういうギャグは若者に受ける」

2.2 森田 (1989)

森田 (1989) は構文的特徴によって「受ける」を次の4種類に分けている。ここでAは主体、CはAへ向かう事物、Eは主体Aに属する部分を示している。森田 (1989) の区分が小泉他 (1989) の区分ほど細分化されていないため、4種類のうち、③④はすべての例文が当てはまるわけではないが、受身の文法的役割を担う機能動詞と見なす可能性がある。

①「EにCを受ける」

例「胸にボールを受ける」「腕に傷を受ける」

②「EでCを受ける」

例「素手でボールを受ける」「水滴をコップで受ける」

③「AがCを受ける」

例「月は太陽光線を受けて輝く」「親友の死に強いショックを受ける」

④「AがBからCを受ける」

例「彼はみんなから尊敬を受けている」「敵から攻撃を受ける」

2.3 岸本 (2010)

岸本 (2010) は「受ける」の多義性を出来事に対する意図性の有無によって「移動」と「行為」の2つに大別することができると指摘している。

例「彼女は先生から影響を受けた。」——移動

「彼女は期末テストを受けた。」——行為

また、「移動」なのか「行為」なのかを判断するための統語的な手段を提供

しており、「移動」の場合は以下の4つの特徴があると述べている。

①「道具」を具現化することができず、可能形や命令形ができない。

例「*彼女は著書で先生から影響を受けた。」——「道具」

「??彼女は先生から攻撃が受けられる。」——可能形

「??先生から影響を受けなさい。」——命令形

②「わざと」のような副詞および目的語節が生起できない。

例「*彼女は、みんなから注目されるために、先生から影響を受けた。」

③起点表現の表出が可能である。

例「学生が先生から影響を大いに受けている。」

「学生が先生からの影響を大いに受けている。」

④受身化できない。

例「*影響が彼女の運命によって受けられた。」

岸本 (2010) の区分によると、「検査」、「手術」、「授業」等の動名詞は「受ける」と共起する場合、受身の意味を表さず、行為を表すことになる。以上の統語的な手段でテストしたり、動詞の意向形「しよう」や願望助動詞「たい」を後続する場合に、確かに「～を」+「受ける」の形式と「レル・ラレル」形の文法的受身形式との違いが前景に出てくる。しかし、これらはいくまでも付け加えた成分で、「受ける」自体に含まれる意味ではない。また「～を」+「受ける」の形式は「働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立つ。主体は受身的立場にある」と森田 (1989:175) が指摘しているように、主体が受け手側であるという点では、「レル・ラレル」形の受身文と共通している。本稿では、この共通した基盤に基づき、岸本 (2010) が指摘している意味的な違いを認めながら、広義の「受身」の概念を採用し、動名詞等の動作名詞と共起する「受ける」を広義の「受身」の文法的役割を担う機能動詞と見なし、考察を進める。

総じて言えば、以上の先行研究のいずれも「受ける」の意味分析や統語的特徴の考察に重きを置き、「受ける」と共起する名詞の性質の違いについてはあまり言及していない。本稿では「受ける」を受身の文法的役割を担う機能動詞

として見なし得るかどうかには、ヲ格名詞の統語的・意味的特徴が大きく関わっていると考える。そこでコーパスを利用して「受ける」はどんなヲ格名詞と結びつくかを調査することによって、「レル・ラレル」形の文法的受身と対照しながら、その特徴を明らかにする。また、「レル・ラレル」形の文法的受身形式と対照する際に、中島(2007)の「語彙的受身」^[註1]という用語を借用し、「～を」+「受ける」の形式を語彙的受身形式と呼ぶことにする。

3 コーパス調査

ここでは、国立国語研究所とLago言語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索システムNLB (<http://nlbninjal.ac.jp/>)を利用して、「受ける」のヲ格名詞を検索した。このうち、頻度34以上のヲ格名詞100語を表1に示す(各活用形を含む「受ける」の出現頻度は20,983、ヲ格名詞の異なり語数が1,939語である)。

表1を見ると、「影響」が1位を占め、次いで「教育」、「被害」、「ショック」の順になることが分かる。100語のうち、「被害」、「ショック」、「それ」、「これ」、「印象」、「衝撃」、「試験」、「打撃」、「扱い」、「洗礼」、「判決」、「恩恵」、「命」、「ダメージ」、「感じ」、「知らせ」、「光」、「こと」、「生」、「支払い」、「取り調べ」、「教え」、「テスト」、「金」、「カウンセリング」、「災害」、「利益」、「の」、「言葉」の29語は動名詞^[註2]ではないが、残りの71語がすべて動名詞である。非動名詞の29語のうち、「扱い」、「感じ」、「知らせ」、「支払い」、「取り調べ」、「教え」の6語は動詞連用形転成名詞で、「被害」、「ショック」、「衝撃」、「打撃」、「命」^[註3]と「ダメージ」の6語は「する」を伴って動詞化できないが、動作性が強く感じられるため、本稿では非動名詞の動作性名詞と呼ぶ。また「それ」、「これ」^[註4]のような指示代名詞や、「印象」、「恩恵」、「生」、「利益」のような一般名詞、および、「試験」、「テスト」^[註5]、「カウンセリング」のようなデキゴト名詞^[註6]もある。これらのヲ格名詞は、「受ける」と結びつく場合、全体受身の意味を含意しないため、まとめてその他の名詞というグループに入れることができる。ここで表1のヲ格名詞を動名詞、動詞連用形転成名詞、非動名詞の動作性名詞とその他の名詞の4類に分類し、その結果を表2に示す。受身の

表1 「受ける」のヲ格名詞(上位100語)^[註7]

	名詞	頻度		名詞	頻度		名詞	頻度		名詞	頻度
1	影響	919	26	評価	108	51	認定	72	76	テスト	48
2	教育	497	27	許可	106	52	感じ	69	〃	宣告	48
3	被害	380	28	保護	105	53	制約	68	〃	金	48
4	ショック	355	〃	融資	105	54	知らせ	66	79	アドバイス	45
5	治療	261	30	判決	104	55	光	65	80	カウンセリング	44
6	報告	220	31	依頼	101	〃	提供	65	〃	災害	44
7	検査	218	〃	処分	101	〃	研修	65	〃	祝福	44
8	それ	212	〃	恩恵	101	58	こと	64	83	差別	43
9	手術	211	34	質問	99	〃	生	64	84	利益	42
10	これ	189	35	電話	98	〃	虐待	64	85	注文	41
11	印象	185	36	承認	97	〃	裁判	64	〃	面接	41
12	衝撃	182	〃	診察	97	62	委託	62	87	講習	40
13	適用	179	38	サービス	96	〃	指摘	62	88	手解き	39
14	訓練	178	39	支援	94	〃	支払い	62	〃	控除	39
15	試験	175	40	感銘	92	65	弁済	61	90	の	38
16	攻撃	161	41	授業	91	66	取り調べ	58	〃	取材	38
17	説明	156	42	連絡	88	〃	認可	58	〃	検診	38
18	指導	145	43	交付	83	68	登録	57	〃	言葉	38
19	打撃	144	44	命	82	69	給付	56	94	注意	37
20	扱い	141	45	指定	81	70	罰	55	〃	講義	37
21	相談	131	46	批判	80	71	損害	54	96	インタビュー	36
22	洗礼	119	47	要請	79	〃	通知	54	〃	審査	36
23	援助	112	48	ダメージ	75	73	支持	51	98	聴取	35
24	刺激	109	〃	指示	75	〃	教え	51	99	手当て	34
25	命令	108	50	診断	74	75	制限	50	〃	空襲	34

表2 「受ける」のヲ格名詞の4種類

動名詞	漢語動名詞	影響、教育、治療、報告、手術、検査等
	和語動名詞	手解き、手当て等
	外来語動名詞	サービス、アドバイス、インタビュー等
動詞連用形転成名詞	扱い、感じ、知らせ、支払い、取り調べ、教え等	
非動名詞の動作性名詞	被害、ショック、衝撃、打撃、命、ダメージ等	
その他の名詞	指示代名詞	それ、これ等
	一般名詞	印象、恩恵、光、生、金、災害、利益、言葉等
	形式名詞	こと、の等
	デキゴト名詞	試験、洗礼、判決、テスト、カウンセリング等

文法的役割を担う機能動詞としての「受ける」と共起するのは動名詞、動詞連用形転成名詞と非動名詞の動作性名詞の3類だと考えられる。次節では、この3類をめぐって、「レル・ラレル」形の文法的受身形式と対照しながら、それぞれの特徴を考察する^[注8]。

4 ヲ格名詞の統語的・意味的・形態的特徴

4.1 動詞連用形転成名詞と非動名詞の動作性名詞

例文(3ab)は動詞の「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式の交替現象を示している。ただ、「レル・ラレル」形と比べ、「動詞連用形転成名詞+を+受ける」形式はごくまれで、むしろ周辺的な用法であるため、どのような動詞が連用形転成名詞に形態変化し、「受ける」のヲ格名詞になるか、またその意味的な制約は何かについては稿を改めて考察する。

- (3) a. 田中さんは友達に誘われた。
 b. 田中さんは友達から誘いを受けた。

一方、例文(4ab)に示されるように、「衝撃」、「打撃」等の非動名詞の動作名詞は「する」を伴って動詞化できないため、文法的受身形式の「レル・ラレル」形が欠如している。この場合、「受ける」を用いた語彙的形式は受身の意味を表す唯一の表現形式である。

- (4) a. 田中さんは親友の死に衝撃を受けた。
 b.*田中さんは親友の死に衝撃された。

4.2 漢語動名詞

本節ではヲ格名詞における最も多い漢語動名詞の統語的・意味的・形態的特徴をめぐって考察を進める。統語的な考察において、和語動名詞と外来語動名

詞は漢語動名詞と同じ傾向を見せている。紙幅の都合により和語動名詞と外来語動名詞への考察を省略する。

ここで文法的受身文と対照するために、まず「レル・ラレル」形の受身文の特徴を概観する。日本語記述文法研究会(2009)によると、受身文は「直接受身文」、「間接受身文」と「持ち主の受身文」の3種類に大別されている。一方、益岡(1987,1991)は受身文(益岡の用語では「受動文」で、「受身文」と同じ意味で用いられている)を「受影受動文」、「属性叙述受動文」、「降格受動文」という3つの類型に分けている。日本語記述文法研究会(2009)の分類と益岡(1987,1991)の分類を照らし合わせて、表3に示す。「属性叙述受動文」は対象の属性を述べる文、「降格受動文」は動作主の背景化が受動化の動機となる文で、それぞれ「働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立つ」語彙的受身文とは基本的に対応関係を成しにくい。また、「間接受身文」は直接的な二者間の働きかけがないため、対応する語彙的受身文が存在しない。

表3 「レル・ラレル」形の受身文

益岡分類	記述文法研究会分類	例文
受影受動文	①直接受身文	鈴木が佐藤に殴られた。
	②間接受身文	私は真夜中に赤ん坊に泣かれた。
	③持ち主の受身文	田中が佐藤に肩を叩かれた。
属性叙述受動文	①直接受身文	その家は高い塀に囲まれている。
降格受動文	①直接受身文	会場の近くに臨時の休憩所が作られた。

益岡(1991:192)は「受影受動文は、ある出来事から主体が何らかの影響を受けるという事態を表すもの」と述べている。つまり受影受動文の成立には「影響性」が大きく関わっている。

次に「影響性」の観点から表1の漢語動名詞の「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式を対照する。

4.2.1 漢語動名詞の結合価

表1の二項漢語動名詞は「影響」、「治療」、「攻撃」、「刺激」、「保護」等がある。ここで、「影響」、「攻撃」、「保護」を例にして説明する。例文(5)(6)(7)の

abはそれぞれパラフレーズの関係にある。

- (5) a. 自分の言葉が誰かに影響し、自分も誰かの言葉に影響される。
b. 自分の言葉が誰かに影響し、自分も誰かの言葉の影響を受ける。
- (6) a. 政府のサイトはハッカーに攻撃された。
b. 政府のサイトはハッカーの攻撃を受けた。
- (7) a. 戦争中、孤児たちはその教会に保護されていた。
b. 戦争中、孤児たちはその教会の保護を受けていた。

ここから二項漢語動名詞の場合、「影響性」が捉えられやすいため、「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式は対応関係を成しやすいことが窺える。

一方、三項漢語動詞の場合は、例文(8)のように、主格のほかにも、無情物の対格(営業成績)と有情物の与格(上司)の両方が取れる。

- (8) 鈴木さんが上司に営業成績を報告した。——能動文

I 無情物の対格をガ格に取る場合

- (9) a. 営業成績が鈴木さんによって報告された。——降格受動文
b.*営業成績が報告を受けた。

ここで、(9b)が非文法的であることから、「レル・ラレル」形の降格受動文は対応する「受ける」を用いた語彙的受身形式が存在しないということが分かる。これも前述した降格受動文と語彙的受身文とは基本的に対応関係を成しにくいことを裏付けている。

II 有情物の与格をガ格に取る場合

- (10) a.?上司が鈴木さんから営業成績を報告された。——文法的受身
b. 上司が鈴木さんから営業成績の報告を受けた。——語彙的受身
- (11) a'. 上司が鈴木さんから営業成績の悪化を報告された。

(11a')に示されるように、「営業成績」を「営業成績の悪化」に置き換えると、文法的受身文の自然さが上がる。「営業成績」より「営業成績の悪化」のほうが主語に及ぶ心理的な影響性を捉えやすいためと考えられる。さらに、「レル・ラレル」形の文法的受身文の成立における「影響性」の重要性をめぐって、次のいくつかの三項漢語動名詞の例文で確認してみる。

- (12) 鈴木さんは本屋に新刊書を注文した。
(13) a.??本屋は鈴木さんから新刊書を注文された。
b. 本屋は鈴木さんから新刊書の注文を受けた。

「注文」の場合は、「影響性」を想定しにくいいため、例文(13a)に示されるように文法的受身文はさらに不自然である。

- (14) 店員は客に商品の使い方を説明した。
(15) a. 客は店員に商品の使い方を説明された。
b. 客は店員から商品の使い方の説明を受けた。

「説明」の場合は、例文(15a)は成り立つが、「影響性」とつじつまを合わせるために、客が商品に興味がないのに、店員から一方的に説明されたという解釈になる。

- (16) 野党は与党に減税を要請した。
(17) a. 与党は野党に減税を要請された。
b. 与党は野党から減税の要請を受けた。

「要請」の場合は、例文(17a)は自然である。それは「減税」が与党にとって財政収入の減少につながり、被害の影響を被る可能性があるという「影響性」を想定しやすいためである。

- (18) UFJはトヨタに百億円を融資した。

- (19)a. トヨタはUFJから百億円を融資された。
 b. トヨタはUFJから百億円の融資を受けた。

「融資」の場合は、例文(19a)は自然である。それは融資により、資金の移動があり、物理的な変化として捉えることができ、「影響性」を想定しやすいためである。

以上の対照を通して、以下のことが分かった。

- ①「受ける」を用いた語彙的受身形式は「働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立つ」ため、基本的に受影受動文に属する直接受身文と対応関係を成しやすい。
 ②動詞の結合価から見て、二項漢語動名詞の場合、「影響性」を捉えられやすいため「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式は対応関係を成しやすい。三項漢語動名詞の場合、動名詞によっては語彙的受身形式は成立するが、文法的受身形式は成立しない。つまり、「影響性」は受影受動文に属する「レル・ラレル」形の文法的受身文の成立を左右する大きな要因であるが、語彙的受身文の成立条件ではない。

4.2.2 漢語動名詞の語構成

本節では「受ける」のヲ格漢語動名詞の語構成上の特徴を考察する。

まず、2つの例文を見てみる。例文(20ab)に示されるように、「砲撃」は文法的受身形式と語彙的受身形式との両方があり、パラフレーズの関係にある。一方、例文(21ab)に示されるように、「撃沈」は文法的受身形式が存在するが、語彙的受身形式は存在しない。

- (20)a. 韓国は北朝鮮に砲撃された。
 b. 韓国は北朝鮮の砲撃を受けた。
 (21)a. 韓国の軍艦は北朝鮮によって撃沈された。
 b.*韓国の軍艦は北朝鮮の撃沈を受けた。

小林(2004:87-89)は、二字漢語動名詞を次の4種類に分けている。「読書」、「投票」のようなVN-Nタイプ二字漢語動名詞、「使用」、「摘出」のようなVN-VNタイプ二字漢語動名詞、「銃殺」、「密売」のようなADJ-VNタイプ二字漢語動名詞、「支配」、「勉強」のような構成要素が抽出できない二字漢語動名詞となっている。

「受ける」のヲ格漢語動名詞を見ると、「融資」、「授業」のようなVN-Nタイプや、「空襲」、「砲撃」のような様態修飾成分+動詞のADJ-VNタイプもあるが、「支援」、「教育」、「指導」等並列関係にあるVN-VNタイプの漢語名詞が最も多い。

また、このVN-VNタイプ二字漢語動名詞については、小林(2004:113-135)は、VN1とVN2どちらが主要部であるかという観点、およびVN1とVN2の時間的前後関係という観点から、さらにそれぞれ3タイプに下位分類している。この分類によると、「撃沈」や「打倒」は右側主要部タイプとVN1がVN2に先行するタイプに属している。結論から先に述べると、本稿では「受ける」のヲ格名詞として不適格であるということから、「撃沈」や「打倒」等の漢語動名詞のVN1とVN2には動作→結果という意味関係があると考えている。以下、文法的受身形式と対照しながら、この意味関係にある漢語動名詞の不適格の理由を探る。

「撃沈」を例にすると、「撃沈」に対応する和語は「撃ち沈める」と考えられ、このうち「沈」は「沈める」という意味で、動作の結果を含意している。以下の例文(22a)は文法的で、例文(22b)は非文法的であることから、「砲撃」は動作の結果を必ずしも含意しないが、「撃沈」は動作の結果を含意することが分かる。

- (22)a. 砲撃されたが、当たらなかった。
 b.*撃沈されたが、沈まなかった。

また、早津(1989:232)も「有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い」と指摘している。「沈める」は「有対他動詞」に属するため、結果の状態に焦

点を当てている^[注9]。

また、「撃沈」のほかに、同様にVN2が結果の状態に焦点を当てている漢語動名詞(23)～(26)は「レル・ラレル」形の文法的受身形式が成立するが、「受ける」を用いた語彙的受身形式は成立しない。

- (23)a. 撃破される
b.*撃破を受ける
- (24)a. 射殺される
b.*射殺を受ける
- (25)a. 打破される
b.*打破を受ける
- (26)a. 打倒される
b.*打倒を受ける

以上の言語事実から、「受ける」のヲ格漢語動名詞の構成要素には動作主の行為の結果の状態に焦点を当てるVNがあってはならないという制約があることが分かる。その理由として考えられるのは「沈」の部分は「受ける」動作というより、むしろ「受けた」結果であるということである。この動作→結果という意味関係をさらに展開すると、「撃を受けて、沈した」のように「VN1した結果、VN2した」という文で表すことができる。つまり、VN1は動作主からの直接的な働きかけで、VN2はその直接的な働きかけによる結果である。VN2が結果であるため、「受ける」のヲ格名詞として適格ではない。

ここに「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式との重要な相違点が表示されている。つまり、その相違点は動作主の行為の射程範囲である。「受ける」を用いた語彙的受身形式のヲ格動名詞は、動作主からの直接的な行為でなければならないが、文法的受身形式の「レル・ラレル」形は、その行為によって引き起こされた結果をも含むことがあり得る。動作→結果という意味関係をもつVN-VNタイプ二字漢語動名詞は文法的受身形式が存在しているが、「受ける」を用いた語彙的受身形式は存在しない。

5 まとめ

以上、コーパス調査を通して受身の文法的役割を担う機能動詞「受ける」のヲ格名詞に焦点を当てて考察した。

まず、多義的な動詞「受ける」は「影響」、「治療」等の動名詞、「衝撃」、「打撃」等の非動名詞の動作性名詞と「扱い」、「知らせ」等の動詞連用形転成名詞をヲ格に取る場合、受身の文法的役割を担う機能動詞として見なすことができる。

次に、「レル・ラレル」形の文法的受身形式と対照しながら、次の3つのことを明らかにした。

- ①「受ける」を用いた語彙的受身形式は「働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立つ」ため、基本的に受影受動文に属する直接受身文と対応関係を成しやすい。
- ②動詞の結合価から見て、二項漢語動名詞の場合、「影響性」を捉えられやすいため「レル・ラレル」形の文法的受身形式と「受ける」を用いた語彙的受身形式は対応関係を成しやすい。三項漢語動名詞の場合、動名詞によっては語彙的受身形式は成立するが、文法的受身形式は成立しない。つまり、「影響性」は受影受動文に属する「レル・ラレル」形の文法的受身文の成立を左右する大きな要因であるが、語彙的受身文の成立条件ではない。
- ③語構成の観点から見て、「受ける」のヲ格漢語動名詞には「撃沈」等のような「動作+結果」タイプがないことから、その動名詞の構成要素には動作主の行為の結果の状態に焦点を当てるVNがあってはならないという制約があることが分かる。一方、「レル・ラレル」形の文法的受身形式は動作主の行為によって引き起こされた結果を含むこともあり得る。

〈名古屋大学大学院生〉

注

- [注1] …… 中島 (2007:100-101) は「受ける」「見つかる」のような受身を含意する動詞を用いて、受身を表す文法的手段を「語彙的受身」と呼ぶことにすると述べている。
- [注2] …… 本稿では影山 (1993) の定義にしたがい、「影響」、「検査」、「アドバイス」のように「する」を伴って動詞化できる名詞のことを動名詞 (VN) と呼ぶ。
- [注3] …… 「打撃する」という言い方もあるが、NLBコーパスでは「打撃する」は4例しかないのに対して、「打撃を与える」は113例、「打撃を加える」は11例あることから、「打撃する」は日常言語ではあまり用いられないことが分かる。また、「命を受ける」の「命」は抽象名詞の「生命」ではなく、「命令・言いつけ」の意味を表すため、非動名詞の動作性名詞の類に入れている。
- [注4] …… 「それ」、「これ」は文脈によっては動名詞や動詞連用形転成名詞や非動名詞の動作性名詞を指している可能性があるが、NLBコーパスの実例を見ている限り、「前件、前述のこと」を指している。
- [注5] …… 「試験」、「テスト」は多義語で、「新建材の耐久性を試験／テストする」という文に示されるように、動名詞となる場合がある。「試験／テストを受ける」の「試験」、「テスト」は「入学・入社・登用などの採否を決めるための考査」で、デキゴト名詞と見なし得る。同じような語には「判決」、「洗礼」等がある。
- [注6] …… ここでいうデキゴト名詞は影山 (2011) の考えに従う。影山 (2011: 38) は「こと」は出来事や状態を指し、出来事や状態というのは時間の流れの中で捉えられる。たとえば、「きのう火事があった」というときの「火事」は出火から消火まで一刻一刻変化していったと想定できる出来事を指す。このような捉え方をされる名詞をデキゴト名詞 (event noun) と呼んでおこう」と述べている。
- [注7] …… 「受ける」のヲ格名詞の上位語には【一般】(65例) というヲ格名詞項目がある。それは固有名詞をまとめて1つのヲ格名詞項目として立てられたものであるため、表1から除外している。また接尾辞に属している「等」(42例) も表1から除外している。
- [注8] …… 「*食べ」、「*割り」等が語ではないため、語彙化できるかどうかは考察の方向の1つとなる。また「殺し」、「壊し」、「殴り」のような他動性の高い動詞からの転成名詞も「受ける」のヲ格名詞にならないのは興味深い現象である。
- [注9] …… 早津 (1989) は「倒す」や「曲げる」のように、対応する自動詞（「倒れる」、「曲がる」）のある他動詞を「有対他動詞」、「たたく」や「読む」のように対応する自動詞のない他動詞を「無対他動詞」と定義している。働きかけの結果の状態に注目する動詞には有対他動詞が多いが、「殺す」等のような無対他動詞もある。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
影山太郎 (編) (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
岸本秀樹 (2010) 「受身の意味を表す「受ける」の語彙概念構造」影山太郎 (編) 『レキコンフォーラム』5, pp.201-218. ひつじ書房
小泉保他 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
中島悦子 (2007) 『日中対照研究 ヴォイス』おうふう
日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版
早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて一意味的な特徴を中心に」『言語研究』95, pp.231-255.
益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

